

付録 万葉集・八代集における「夕暮の歌」一覧

万葉集

讃岐国の安益郡に幸したまひし時に、軍王の、山を見て作りし歌

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず むらきもの 心を痛み ぬえこ鳥 うらなけ
居れば 玉だすき かけのよろしく 遠つ神 わが大君の 行幸の 山越す風の 独り居る わが
衣手に 朝夕に かへらひぬれば ますらを と 思へる我も 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る た
づきを知らに 網の浦の 海人娘子らが 焼く塩の 思ひそ焼くる わが下心 (万葉・巻一・5・軍
王)

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜さやけかりこそ (万葉・巻一・15・天智天皇)

軽皇子の安騎の野に宿りし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌

やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さびせすと 太敷かす 京を置きて
こもりくの 泊瀬の山は 真木立つ 荒き山道を 岩が根 禁樹押しなべ 坂鳥の 朝越えまして
玉かざる 夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に はたすすき 小竹を押しなべ 草枕 旅宿り
せず 古思ひて (万葉・巻一・45・柿本人麻呂)

慶雲三年丙午、難波宮に幸したまひし時に志貴皇子の御作りたまひし歌

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ (万葉・巻一・64・志貴皇子)

弓削皇子の、紀皇女を思ひし御歌四首 (中の一首)

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅鹿の浦に玉藻刈りてな (万葉・巻二・121・弓削皇子)

柿本朝臣人麻呂の、石見国より妻を別れて上り来たりし時の歌二首 (中の一首)

……大船の 渡の山の 黄葉の 散りのまがひに 妹が袖 さやにも見えず 妻ごもる 屋上
の山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ 入日さしぬれ ますらを
と 思へる我も しきたへの 衣の袖は 通りに濡れぬ (万葉・巻二・135・柿本人麻呂)

高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌一首

……使はしし 御門の人も 白たへの 麻衣着て 埴安の 御門の原に あかねさす 日のことごと
と 鹿じもの い這ひ伏しつ つ ぬばたまの 夕に至れば 大殿を 振り放け見つつ 鶉なす い
這ひもとほり 侍へど 侍ひえねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆きも いまだ過ぎぬに 思ひも
いまだ尽きねば…… (万葉・巻二・199・柿本人麻呂)

柿本朝臣人麻呂の、妻死し後に泣血哀慟して作りし歌二首

天飛ぶや 軽の道は 我妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど やまず行かば 人
目を多み まねく行かば 人知りぬべみ さね葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて 玉かざる
磐垣淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の 暮れぬるがごと 照る月の 雲隠るごと 沖つ
藻の なびきし妹は 黄葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使ひの言へば 梓弓 音に聞きて 言は

むすべ せむすべ知らに 音のみを 聞きてありえねば 我が恋ふる 千重の一重も 慰もる 心
もありやと 我妹子が やまず出で見し 軽の市に 我が立ち聞けば 玉だすき 畝傍の山に 鳴
く鳥の 声も聞こえず 玉梓の 道行き人も ひとりだに 似てし行かねば すべをなみ 妹が名
呼びて 袖そ振りつる (万葉・巻二・207・柿本人麻呂)

うつせみと 思ひし時に 取り持ちて 我が二人見し 走り出の 堤に立てる 槻の木の こちご
ちの枝の 春の葉の しげきがごとく 思へりし 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世
の中を 背きしえねば かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちい
まして 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り
与ふる ものしなれば 男じもの わきばさみ持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋
のうちに 昼はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けども せもすべ知らに 恋ふれ
ども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言へば 岩根さく
みて なづみ来し 良けくもそなき うつせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見え
なく思へば (万葉・巻二・210・柿本人麻呂)

柿本朝臣人麻呂の歌一首

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ (万葉・巻三・266・柿本人麻呂)

高市連黒人の驛旅の歌八首 (中の一)

いづくにか我が宿りせむ高島の勝野の原にこの日暮れなば (万葉・巻三・275・高市黒人)

弁基の歌一首

真土山夕越え行きて廬前の角太河原にひとりかも寝む (万葉・巻三・298・弁基)

日置少老の歌一首

縄の浦に塩焼く火のけタされば行き過ぎかねて山にたなびく (万葉・巻三・354・日置少老)

上古麻呂の歌一首

今日もかも明日香の川の夕去らずかはつ鳴く瀬のさやけくあるらむ (万葉・巻三・356・上古麻呂)

仙の柘枝の歌三首 (中の一)

この夕柘のさ枝の流れ来ば梁は打たず取らずかもあらむ (万葉・巻三・386・作者未詳)

石田王の卒せし時、丹生王の作りし歌一首

……天地に 悔しきことの 世の中の 悔しきことは 天雲の そくへの極み 天地の 至れるま
でに 杖つきも つかずも行きて 夕占問ひ 石占もちて わがやどに みもろを立てて……
(万葉・巻三・420・丹生王)

また、家持の作りし歌一首

……うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごとく あしひきの 山道をさして 入日な
す 隠りにしかば そこ思ふに 胸こそ痛き…… (万葉・巻三・466・大伴家持)

笠女郎の、大伴宿禰家持に贈りし歌二十四首 (中の一)

わがやどの夕陰草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも (万葉・巻四・594・笠女郎)

- 笠女郎の、大伴宿禰家持に贈りし歌二十四首（中の一）
- 夕されば物思まさる見し人の言問ふ姿面影にして（万葉・巻四・602・笠女郎）
- 豊前国の娘子大宅女の歌一首
- 夕闇は道たづたづし月待ちていませ我背子その間にも見む（万葉・巻四・709・大宅女）
- また家持の、坂上大嬢に和せし歌一首
- 月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をそせし行かまくを欲り（万葉・巻四・736・大伴家持）
- さらに、大伴宿禰家持、坂上大嬢に贈りし歌十五首（中の一）
- 夕さらば屋戸開け設けてわれ待たむ夢に相見に来むとふ人を（万葉・巻四・744・大伴家持）
- 月を詠みき
- 玉垂の小簾の間通し一人居て見るしるしなき夕月夜かも（万葉・巻七・1073・作者未詳）
- 摂津にして作りき
- しなが鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿りはなくて（万葉・巻七・1140・作者未詳）
- 摂津にして作りき
- 梶の音そほのかにすなる海人娘子沖つ藻刈りに舟出すらしも一に云ふ、「夕されば梶の音すなり」（万葉・巻七・1152・作者未詳）
- 羈旅にして作りき
- 家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴き渡る（万葉・巻七・1161・作者未詳）
- 羈旅にして作りき
- 夕なぎにあさりする鶴潮満てば沖波高み己が妻呼ぶ（万葉・巻七・1165・作者未詳）
- 羈旅にして作りき
- 若の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕は大和し思ほゆ（万葉・巻七・1219・作者未詳）
- 羈旅にして作りき
- あしひきの山行き暮らし宿借らば妹立ち待ちて宿貸さむかも（万葉・巻七・1242・作者未詳）
- 衣に寄せき
- 櫛の解き洗ひ衣の怪しくもことに着欲しきこの夕かも（万葉・巻七・1314・作者未詳）
- 草に寄せき
- 山高み夕日隠りぬ浅茅原後見むために標結はましを（万葉・巻七・1342・作者未詳）
- 月に寄せき
- み空ゆく月詠をとこ夕去らず目には見れども寄るよしもなし（万葉・巻七・1372・作者未詳）
- 草香山の歌一首
- おしてる 難波を過ぎて うちなびく 草香の山を 夕暮に 我が越え来れば 山も狭に 咲ける
あしひの 悪しからぬ 君をいつしか 往きてはや見む（万葉・巻八・1428・作者未詳）
- 天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村の、入唐使に贈りし歌一首
- 玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの 世の人なれば 大君の 命恐み

夕されば 鶴が妻呼ぶ 難波瀉 三津の崎より 大船に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島
伝ひ い別れ行かば 留まれる 我は幣引き 斎ひつつ 君をば待たむ 早帰りませ (万葉・巻八・
1453・笠金村)

岡本天皇の御製の歌一首

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも (万葉・巻八・1511・岡本天皇)

湯原王の蟋蟀の歌一首

夕月夜心もしのに白露の置くこの庭にこほろぎ鳴くも (万葉・巻八・1552・湯原王)

大伴田村大嬢の、妹坂上大嬢に与へし歌二首 (中の一)

わがやどの秋の萩咲く夕影に今も見てしか妹が姿を (万葉・巻八・1622・大伴田村大嬢)

弓削皇子に献りし歌三首 (中の一)

妹があたり繁き雁が音夕霧に來鳴きて過ぎぬすべなきまでに (万葉・巻九・1702・柿本人麻呂歌集)

元仁の歌三首 (中の一)

苦しくも暮れ行く日かも吉野川清き川原を見れど飽かなくに (万葉・巻九・1721・元仁)

春三月、諸卿大夫等の難波に下りし時の歌二首 (中の一)

白雲の 竜田の山を 夕暮に うち越え行けば 滝の上の 桜の花は 咲きたるは 散り過ぎにけ
り 含めるは 咲き継ぎぬべし こちごちの 花の盛りに 見さずども かにもかくにも 君がみ
行きは 今にしあるべし (万葉・巻九・1749・高橋虫麻呂)

舍人皇子に献りし歌二首 (中の一)

泊瀬川夕渡り来て吾妹子が家の門に近づきにけり (万葉・巻九・1775・柿本人麻呂歌集)

鹿島郡の苺野橋にして大伴卿に別れし歌一首

牡牛の 三宅の瀉に さし向かふ 鹿島の崎に さ丹塗りの 小船を設け 玉巻きの 小梶しじ貫
き 夕潮の 満ちのとどみに 御船子を 率ひ立てて 呼び立てて 御船出でなば 浜も狭に 後
れ並み居て 臥いまるび 恋ひかも居らむ 足ずりし 音のみや泣かむ 海上の その津をさして
君が漕ぎ行かば (万葉・巻九・1780・高橋虫麻呂)

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも (万葉・巻十・1812・柿本人麻呂)

玉かぎる夕さり来れば獵人の弓月が岳に霞たなびく (万葉・巻十・1816・柿本人麻呂)

月を詠みき

春霞たなびく今日の夕月夜清く照るらむ高松の野に (万葉・巻十・1874・作者未詳)

月を詠みき

春されば木の木の暗の夕月夜おほつかなしも山陰にして一に云ふ、「春されば木の暗多み夕月夜」(万葉・
巻十・1875・作者未詳)

月を詠みき

朝霞春日の暮れば木の間より移ろふ月を何時とか待たむ (万葉・巻十・1876・作者未詳)

野遊

春の野に心延べむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか (万葉・巻十・1882・作者未詳)

鳥を詠みき

木の暗の夕闇なるに一に云ふ、「なれば」ほととぎすいづくを家と鳴き渡るらむ (万葉・巻十・1948・作者未詳)

七夕

夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人をとこ (万葉・巻十・2010・作者未詳)

七夕

秋風の清き夕に天の川舟漕ぎ渡る月人をとこ (万葉・巻十・2043・作者未詳)

七夕

この夕降り来る雨は彦星のはや漕ぐ船の櫂の散りかも (万葉・巻十・2052・作者未詳)

七夕

古に織りてし服をこの夕衣に縫ひて君待つ我を (万葉・巻十・2064・作者未詳)

花を詠みき

夕されば野辺の秋萩末若み露に枯れけり秋待ちかてに (万葉・巻十・2095・柿本人麻呂歌集)

花を詠みき

この夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩の明日咲かむ見む (万葉・巻十・2102・作者未詳)

花を詠みき

朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけれ (万葉・巻十・2104・作者未詳)

蟬を詠みき

夕影に来鳴くひぐらしここたくも日ごとに聞けど飽かぬ声かも (万葉・巻十・2157・作者未詳)

蟋を詠みき

影草の生ひたるやどの夕影に鳴くこほろぎは聞けど飽かぬかも (万葉・巻十・2159・作者未詳)

蝦を詠みき

草枕旅に物思ひ我が聞けば夕かたまけて鳴くかはづかも (万葉・巻十・2163・作者未詳)

蝦を詠みき

上つ瀬にかはづ妻呼ぶ夕されば衣手寒み妻まかむとか (万葉・巻十・2165・作者未詳)

露を詠みき

夕立の雨降るごとに一に云ふ、「うち降れば」春日野の尾花が上の白露思ほゆ (万葉・巻十・2169・作者未詳)

黄葉を詠みき

露霜の寒き夕の秋風にもみちにけらしも妻梨の木は (万葉・巻十・2189・作者未詳)

黄葉を詠みき

夕されば雁の越え行く竜田山しぐれに競ひ色づきにけり (万葉・巻十・2214・作者未詳)

河を詠みき

夕さらずかはつ鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくし良しも (万葉・巻十・2222・作者未詳)

風を詠みき

恋ひつつも稲葉かき分け家居れば乏しくもあらず秋の夕風 (万葉・巻十・2230・作者未詳)

露に寄せき

秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜はふけぬとも (万葉・巻十・2252・作者未詳)

花に寄せき

朝露に咲きすさびたる月草の日くたつなへに消ぬべく思ほゆ (万葉・巻十・2281・作者未詳)

花に寄せき

朝咲き夕は消ぬる月草の消ぬべき恋も我はするかも (万葉・巻十・2291・作者未詳)

雪を詠みき

夕されば衣手寒し高松の山の木ごとに雪ぞ降りたる (万葉・巻十・2319・作者未詳)

雪を詠みき

あしひきの山に白きは我がやどに昨日の夕降りし雪かも (万葉・巻十・2324・作者未詳)

何時はしも恋ひぬ時とはあらねども夕かたまけて恋はずべなし (万葉・巻十一・2373・作者未詳)

玉かぎる昨日の夕見しものを今日の朝に恋ふべきものか (万葉・巻十一・2391・作者未詳)

高麗錦紐解き開けて夕だに知らざる命恋ひつつやあらむ (万葉・巻十一・2406・作者未詳)

夕されば床の辺去らぬ黄楊枕なにか女の主待ちかたき (万葉・巻十一・2503・作者未詳)

言霊の八十の衢に夕占問ふ占まさに告る妹は相寄らむ (万葉・巻十一・2506・作者未詳)

夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする (万葉・巻十一・2588・作者未詳)

験なき恋をもするか夕されば人の手まきて寝らむ児ゆゑに (万葉・巻十一・2599・作者未詳)

夕占にも占にも告れる今夜だに來まさぬ君を何時とか待たむ (万葉・巻十一・2613・作者未詳)

逢はなくて夕占を問ふと幣に置くにわが衣手はまたそ続くべき (万葉・巻十一・2625・作者未詳)

夕月夜曉闇の朝影に我が身はなりぬ汝を思ひかねて (万葉・巻十一・2664・作者未詳)

妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる月待つごとし (万葉・巻十一・2666・作者未詳)

朽綱山夕居る雲の薄れ去らば我は恋ひむな君が目を取り (万葉・巻十一・2674・作者未詳)

夕占問ふわが袖に置く白露を君に見せむと取れば消につつ (万葉・巻十一・2686・作者未詳)

夕凝りの霜置きにけり朝戸出にいたくし踏みて人に知らゆな (万葉・巻十一・2692・作者未詳)

みさご居る渚にゐる船の夕潮を待つらむよりは我こそまされ (万葉・巻十一・2831・作者未詳)

ぬばたまの寝ねてし夕の物思に割けにし胸は止む時もなし (万葉・巻十二・2878・作者未詳)

朝去にて夕は来ます君ゆゑにゆゆしくも我は嘆きつるかも (万葉・巻十二・2893・作者未詳)

あかぬさす日の暮れゆけばすべをなみ千度嘆きて恋ひつつそ居る (万葉・巻十二・2901・作者未詳)

夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しかりけれ (万葉・巻十二・2922・作者未詳)

春日野に照れる夕日のよそのみに君を相見て今そ悔しき (万葉・巻十二・3001・作者未詳)

夕月夜曉闇のおほほしく見し人ゆゑに恋ひわたるかも (万葉・巻十二・3003・作者未詳)

あしひきの山を木高み夕月をいつかと君を待つが苦しき (万葉・巻十二・3008・作者未詳)
 かく恋ひむものと知りせば夕置きて朝は消ぬる露ならましを (万葉・巻十二・3038・作者未詳)
 夕置きて朝は消ゆる白露の消ぬべき恋もわれはするかも (万葉・巻十二・3039・作者未詳)
 玉かつま安倍島山の夕露に旅寝えせめや長きこの夜を (万葉・巻十二・3152・作者未詳)
 玉かつま島熊山の夕暮れにひとりか君が山路越ゆらむ一に云ふ、「夕露に長恋しつ寝ねかてぬかも」(万葉・巻十二・3193・作者未詳)
 豊国の企救の長浜行き暮し日の暮れ行けば妹をしぞ思ふ (万葉・巻十二・3219・作者未詳)
 ……行きし君 いつ来まさむと 玉梓の 道に出で立ち 夕占を わが問ひしかば 夕占の われに告ぐらく…… (万葉・巻十三・3318・作者未詳)
 日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ (万葉・巻十四・3402・東歌)
 あぜと言へかさ寝に逢はなくに真日暮れて宵なは来なに明けぬしだ来る (万葉・巻十四・3461・東歌)
 夕占にも今夜と告らろわが背なはあぜそも今夜よし来まさぬ (万葉・巻十四・3469・東歌)
 夕さればみ山を去らぬ布雲のあぜか絶えむと言ひし児ろはも (万葉・巻十四・3513・東歌)
 葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば惚はむ (万葉・巻十四・3570・東歌)
 新羅に遣はされし使人等別れを悲しみて贈答し、海路に及びて情を働めて思ひを陳べき。所に当たりて誦ひし古歌を並せたり
 夕さればひぐらし来鳴く生駒山越えてそ吾が来る妹が目を欲り (万葉・巻十五・3589・秦間満)
 長門の浦より船出せし夜に、月の光を仰ぎ観て作りし歌三首 (中の一首)
 月詠の光を清み夕なぎに水手の声呼び浦廻漕ぐかも (万葉・巻十五・3622・遣新羅使)
 物に属けて思ひを發せし歌一首
 ……直向かふ 敏馬をさして 潮待ちて 水脈引き行けば 沖辺には 白波高み 浦廻より 漕ぎて渡れば 吾妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬ さ夜ふけて 行くへを知らに 我が心 明石の浦に 船泊めて 浮き寝をしつつ わたつみの 沖辺を見れば いざりする 海人の娘は 小舟乗り つららに浮けり…… (万葉・巻十五・3627・遣新羅使)
 七夕に天漢を仰ぎ観て、各々所思を陳べて作る歌三首 (中の一首)
 夕月夜影立ち寄り合ひ天の川漕ぐ舟人を見るがともしさ (万葉・巻十五・3658・遣新羅使)
 海辺にして月を望みて作りし歌九首 (中の一首)
 夕されば秋風寒し吾妹子が解き洗ひ衣行きてはや着む (万葉・巻十五・3666・遣新羅使)
 夫君を恋ひし歌一首
 ……いまさらに 君か我を呼ぶ たらちねの 母の命か 百足らず 八十の衢に 夕占にも 占にもそ問ふ 死ぬべき我がゆゑ (万葉・巻十六・3811・車持娘子)
 夕立の雨うち降れば春日野の尾花が末の白露おもほゆ (万葉・巻十六・3819・小鯛王)
 夕づく日さすや川辺に作る屋の形を宜しみうべ寄そりけり (万葉・巻十六・3820・小鯛王)

天平二年庚午の冬十一月、大宰師大伴卿の、大納言に任ぜられて京に上りし時に、僊従等別に海路を取りて京に入りき。ここに羈旅を悲傷して各所心を陳べて作りし歌十首（中の一）
玉はやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば家をしそ思ふ（万葉・巻十七・3895・作者未詳）

恋緒を述べし歌一首

……あをによし 奈良の我家に ぬえ鳥の うら泣けしつ 下恋に 思ひうらぶれ 門に立ち
夕占問ひつ 我を待つと 寝すらむ妹を 逢ひてはや見む（万葉・巻十七・3978・大伴家持）

天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑の桃李の花を眺矚して作りし二首

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ（万葉・巻十九・4139・大伴家持）
わが園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも（万葉・巻十九・4140・大伴家持）

世間の無常を悲しみし歌一首

天地の 遠き初めよ 世の中は 常なきものと 語り継ぎ 流らへ来たれ 天の原振り放け見れば
照る月も 満ち欠けしけり あしひきの 山の木末も 春されば花咲きにほひ 秋づけば 露霜負
ひて 風交じり 黄葉散りけり うつせみも かくのみならし 紅の 色もうつろひ ぬばたまの
黒髪変はり 朝の笑み 夕変はらひ 吹く風の 見えぬがごとく 行く水の 止まらぬごとく 常
もなく うつろふ見れば にはたづみ 流るる涙 留めかねつも（万葉・巻十九・4160・大伴家持）

二十四日は立夏四月の節に応る。これに因りて二十三日の暮れに、忽ちに霍公鳥の曉に喧く声
を思ひて作りし歌二首

常人も起きつつ聞くそほととぎすこの曉に来鳴く初声（万葉・巻十九・4171・大伴家持）
ほととぎす来鳴きとよめば草取らむ花橋をやどには植ゑずて（万葉・巻十九・4172・大伴家持）

霍公鳥と藤の花とを詠みし一首

桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに 青柳の 細き眉根を 笑み曲がり 朝影見つつ を
とめらが 手に取り持てる まそ鏡 二上山に 木の暗の 繁き谷辺を 呼びとよめ 朝飛び渡り
夕月夜 かそけき野辺に はろはろに 鳴くほととぎす 立ち潜くと 羽触れに散らす 藤波の
花なつかしみ 引き攀ちて 袖に扱入れつ 染まば染むとも（万葉・巻十九・4192・大伴家持）

二十三日、興に依りて作りし歌二首

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも（万葉・巻十九・4290・大伴家持）
わがやどのい笹群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（万葉・巻十九・4291・大伴家持）

七夕の歌八首（中の一）

初秋風涼しき夕解かむとそ紐は結びし妹に逢はむため（万葉・巻二十・4306・大伴家持）

五月九日、兵部少補大伴宿祢家持の宅に集飲せし歌四首（中の一）

我が背子がやどなる萩の花咲かむ秋の夕は我を偲はせ（万葉・巻二十・4444・大原今城）

智努女王の卒せし後に、円方女王の悲傷して作りし歌一首

夕霧に千鳥の鳴きし佐保道をば荒らしやしてむ見るよしをなみ（万葉・巻二十・4477・円方女王）

古今集

- 雲林院親王のもとに、花見に、北山のほとりにまかれりける時に、よめる
いざけふは春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の影かほ (古今・春下・95・素性)
- 題しらず
- ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける (古今・秋上・204・よみ人しらず)
- 題しらず
- ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし (古今・秋上・205・よみ人しらず)
- 題しらず
- 我のみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕かげの大和撫子 (古今・秋上・244・素性)
- 長月の晦日の日、大井にて、よめる
- 夕月夜小倉の山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ (古今・秋下・312・紀貫之)
- 題しらず
- 夕されば衣手寒しみ吉野のよしのの山にみ雪ふるらし (古今・冬・317・よみ人しらず)
- 歌奉れ、と仰せられし時に、よみて、奉れる
- ゆく年の惜しくもあるかなますかがみ見る影さへに暮れぬと思へば (古今・冬・342・紀貫之)
- 人の花山にまうできて、夕さりつ方、帰りなむとしける時に、よめる
- 夕暮の籬は山と見えななむ夜は越えじと宿りとるべく (古今・離別・392・遍昭)
- 武蔵国と下総国との中にある隅田河のほとりに至りて、都のいと恋しう覚えければ、しばし河のほとりに下り居て、思遣れば、限りなく遠くも来にける哉と思詫びて、眺め居るに、渡守、はや舟に乗れ、日暮れぬと言ひければ、舟に乗りて渡らむとするに、皆人もの恠しくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の、嘴と脚と赤き、河のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず、渡守に、これは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥と言ひけるを聞きて、よめる
- 名にし負はばいざ言とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと (古今・羈旅・410・在原業平)
- 但馬国の湯へまかりける時に、二見浦と言ふ所に泊りて、夕さりの餉賜べけるに、供にありける人々、歌よみけるついでに、よめる
- 夕月夜おぼつかなきを玉匣ふたみの浦はあけてこそ見め (古今・羈旅・417・藤原兼輔)
- 題しらず
- 夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて (古今・恋一・484・よみ人しらず)
- 題しらず
- 夕月夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋もするかな (古今・恋一・490・よみ人しらず)
- 題しらず

唐衣日も夕暮になる時は返す返すぞ人は恋しき (古今・恋一・515・よみ人しらず)

題しらず

夕さればいとど干がたきわが袖に秋の露さへおきそはりつつ (古今・恋一・545・よみ人しらず)

題しらず

いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり (古今・恋一・546・よみ人しらず)

題しらず

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼む暮るる夜ごとに (古今・恋二・555・素性)

寛平御時后宮歌合の歌

夕されば蛍より異にもゆれども光見ねばや人のつれなき (古今・恋二・562・紀友則)

題しらず

来めやとは思ふ物からひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつつ (古今・恋五・772・よみ人しらず)

題しらず

来ぬ人を松夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ (古今・恋五・777・よみ人しらず)

題しらず

夕されば人なき床をうち払ひ嘆かむためとなれるわが身か (古今・恋五・815・よみ人しらず)

紀友則が、身まかりにける時、よめる

明日知らぬわが身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ (古今・哀傷・838・紀貫之)

深草帝の御国忌の日、よめる

草深き霞の谷にかげかくし照る日の暮れし今日にやはあらぬ (古今・哀傷・846・文屋康秀)

中務親王の、家の池に、舟を作りて、下し初めて遊びける日、法皇御覽じにおはしましたりけ

り。夕さりつ方、帰りおはしまさむとしける折に、よみて、奉りける

水の上に浮べる舟の君ならばここぞ泊りと言わましものを (古今・雑上・920・伊勢)

題しらず

……色にいでば 人知りぬべみ すみぞめの 夕になれば ひとりゐて あはれあはれと 嘆きあ
まり せむすべなみに 庭にいでて 立ちやすらへば 白妙の 衣の袖に 置く露の 消なば消ぬ
べく、思へども 猶嘆かれぬ 春霞 よそにも人に 逢はむと思へば (古今・雑体・1001・よみ人
しらず)

くれのおも

来し時と恋ひつつをれば夕暮の面影にのみ見えわたるかな (古今・墨滅歌・1103・貫之)

後撰集

題しらず

春くれば木がくれ多き夕月夜おぼつかなしも花かげにして (後撰・春中・62・よみ人しらず)

返し

君にだにとはれでふれば藤の花たそがれ時も知らずぞありける (後撰・春下・139・紀貫之)

題しらず

惜しめども春の限りの今日のまた夕暮にさへなりにけるかな (後撰・春下・141・よみ人しらず)

弥生の晦日

花しあらば何かは春の惜しからん暮るとも今日は嘆かざらまし (後撰・春下・144・よみ人しらず)

弥生の晦日

暮れてまた明日とだになき春の日を花の影にて今日は暮らさむ (後撰・春下・145・凡河内躬恒)

人のもとにつかはしける

逢ふと見し夢にならひて夏の日の暮れがたきをも嘆きつるかな (後撰・夏・173・藤原安国)

題しらず

秋風のうち吹きそむる夕暮はそらに心ぞわびしかりける (後撰・秋上・221・よみ人しらず)

文月の七日に、「夕方、詣で来む」と言ひて侍けるに、雨降り侍ければ、詣で来て

雨降りて水まさりけり天河こよひはよそに恋ひむとや見し (後撰・秋上・227・源中正)

七日、人のもとより、返事に、「今宵逢はん」と言ひおこせて侍ければ

恋ひ恋ひて逢はむと思ふ夕暮はたなばたつめもかくぞあるらし (後撰・秋上・231・よみ人しらず)

題しらず

ひぐらしの声聞く山の近けれや鳴きつるなへに入り日さすらん (後撰・秋上・254・紀貫之)

八月中の十日許に、雨のそほふりける日、女郎花掘りに藤原師尹を野辺に出だして、遅く帰り

ければ、つかはしける

暮れはてば月も待つべし女郎花雨止めてとは思はざらなん (後撰・秋中・294・藤原実頼)

題しらず

女郎花花の盛りに秋風の吹く夕暮を誰に語らん (後撰・秋中・341・よみ人しらず)

相撲の還鬘の暮つ方、女郎花を折りて、敦慶親王のかざしにさすとて

女郎花花の名ならぬ物ならば何かは君がかざしにもせん (後撰・秋中・348・藤原定方)

題しらず

ひぐらしの声もいとなく聞ゆるは秋夕暮になればなりけり (後撰・秋下・420・紀貫之)

親のほかにかかりて遅く帰りければ、つかはしける

神無月時雨降るにも暮るる日を君待つほどはながしとぞ思ふ (後撰・冬・461・人のむすめのやつなりける)

あひ知りて侍ける人のもとに、「返事見む」とてつかはしける

来や来やと待つ夕暮と今はとて帰る朝といづれまされり (後撰・恋一・510・元良親王)

返し

夕暮は松にもかかる白露のおくる朝や消えは果つらむ (後撰・恋一・511・藤原かつみ)

人のもとに、しばしばまかりけれど、逢ひがたく侍ければ、物に書きつけ侍ける
 暮れぬとて寝てゆくべくもあらずにたどるたどるも帰るまされり (後撰・恋二・628・在原業平)
 人を思ひかけて心地もあらずやありけん、物も言はずして、日暮るれば、起きもあがらずと聞
 きて、この思かけたる女のもとより、「などかくすきすきしくは」と言ひて侍りければ
 言はで思ふ心ありその浜風に立つ白浪のよるぞわびしき (後撰・恋二・689・よみ人しらず)
 題しらず
 夕されば我が身のみこそ悲しけれいづれの方に枕定めむ (後撰・恋三・739・藤原兼茂女)
 女につかはしける
 かげろふのほめきつれば夕暮の夢かとのみぞ身をたどりつる (後撰・恋四・856・よみ人しらず)
 大秦わたりに大輔が侍りけるに、つかはしける
 限りなく思ひ入り日のともにのみ西の山べをながめやるかな (後撰・恋四・879・小野道風)
 御匣殿に始めてつかはしける
 今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり (後撰・恋四・882・藤原敦忠)
 思ひ忘れにける人のもとにまかりて
 夕闇は道も見えねど旧里はもと来し駒にまかせてぞ来る (後撰・恋五・978・よみ人しらず)
 頼めたりける人に
 夕されば思ひぞ繁き待つ人の来むや来じやの定めなければ (後撰・恋六・1062・よみ人しらず)
 病ひし侍りて、近江の関寺に籠りて侍りけるに、前の道より、閑院の御、石山にまうでけるを、
 「ただ今なん行き過ぎぬる」と人の告げ侍りければ、追ひてつかはしける
 相坂のゆふつけに鳴く鳥の音を聞きとがめずぞ行きすぎにける (後撰・雑二・1126・藤原敏行)
 いその神といふ寺にまうでて、日の暮れにければ、夜明けてまかり帰らむとて、とどまりて、
 「この寺に遍昭侍り」と人の告げ侍りければ、物言ひ心見むとて、言ひ侍りける
 岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我に貸さん (後撰・雑三・1195・小野小町)
 伏見といふ所にて、その心をこれかれよみけるに
 菅原や伏見の暮れに見わたせば霞にまがふ小初瀬の山 (後撰・雑三・1242・よみ人しらず)
 ひとり侍りけるころ、人のもとより「いかにぞ」ととぶらひて侍れば、あさがほの花につけ
 てつかはしける
 夕暮の寂しき物は槿の花をたのめる宿にぞありける (後撰・雑四・1288・よみ人しらず)
 先帝おはしまさで、又の年の正月一日贈り侍ける
 いたづらに今日や暮れなんあたらしき春の始めは昔ながらに (後撰・慶賀 哀傷・1396・藤原定方)
 あひ知りて侍りける女の身まかりにけるを、恋ひ侍りける間に、夜ふけて鶯鶯の鳴き侍りけれ
 ば
 夕されば寝にゆく鶯鶯のひとりして妻恋ひすなる声のかなしさ (後撰・慶賀 哀傷・1400・藤原冬嗣)
 妻の身まかりての年のしはすのつごもりの日、ふるごと言ひ侍りけるに

亡き人のともにし帰る年ならば暮れゆく今日はいれしからまし (後撰・慶賀 哀傷・1424・藤原兼輔)

拾遺集

閏三月侍けるつごもりに

常よりものどけかりつる春なれど今日の暮るるは飽かずぞありける (拾遺・春・78・凡河内躬恒)

齋院屏風に

かりにとて来べかりけるや秋の野の花見るほどに日も暮れぬべし (拾遺・秋・163・よみ人しらず)

大井河に人々まかりて歌詠み侍りけるに

もみぢ葉を今日はなほ見む暮れぬとも小倉の山の名にはさはらじ (拾遺・秋・195・大中臣能宣)

題しらず

夕されば佐保の河原の河霧に友まどはせる千鳥鳴くなり (拾遺・冬・238・紀友則)

題しらず

別れては逢はむ逢はじぞ定なきこの夕暮や限りなるらん (拾遺・別・312・よみ人しらず)

唐へ遣はしける時詠める

夕されば衣手寒しわざもこが解き洗ひ衣行きてはや着む (拾遺・雑上・478・柿本人麻呂)

題しらず

山高み夕日かくれぬ浅茅原後見むために標結はなしを (拾遺・雑下・546・柿本人麻呂)

ある男のもの言ひ侍りける女の、忍びて逃げ侍りて、年ごろありて消息して侍けるに、男の詠み侍りける

……なごさに来るる 夕千鳥 うらみは深く 満つ潮に 袖のみいとど 濡れつゝぞ あとも思はぬ 君により かひなき恋に なにしかも 我のみひとり うき舟の こがれて世には 渡るらん …… (拾遺・雑下・573・よみ人しらず)

始めて女の許にまかりて、あしたに遣はしける

逢ふ事を待ちし月日のほどよりも今日の暮こそ久しかりけれ (拾遺・恋二・714・大中臣能宣)

題しらず

いつしかと暮を待つ間の大空は曇るさへこそうれしかりけれ (拾遺・恋二・722・よみ人しらず)

女の許にまかり初めて

日のうちに物を二度思ふかなとく明けぬると遅く暮ると (拾遺・恋二・723・大江為基)

題しらず

うつつにも夢にも人に夜し逢へば暮れゆくばかりうれしきはなし (拾遺・恋二・725・よみ人しらず)

題しらず

暁の別れの道を思はずは暮れ行く空はうれしからまし (拾遺・恋二・726・よみ人しらず)

天曆御時歌合に

夢のごとなどか夜しも君を見む暮るる待つ間もさだめなき世を (拾遺・恋二・734・壬生忠見)
 旅の思ひを述ぶといふことを

あしひきの山越え暮れて宿借らば妹立ち待ちて寝ねざらむかも (拾遺・恋三・781・石上乙麿)
 題しらず

まさしてふ八十のちまたに夕占問ふ占まさにせよ妹に逢ふべく (拾遺・恋三・806・柿本人麻呂)
 題しらず

夕占問ふ占にもよくあり今宵だに來ざらむ君をいつか待つべき (拾遺・恋三・807・柿本人麻呂)
 題しらず

あしひきの山郭公里馴れてたそかれ時に名のりすらしも (拾遺・雑春・1076・大中臣輔親)
 清慎公五十賀の屏風に

走り井のほどを知らばや相坂の関引き越ゆる夕かげの駒 (拾遺・雑秋・1108・清原元輔)
 春日使にまかりて、歸りてすなはち女のもとに遣はしける

暮ればとく行きて語らむ逢ふ事のとほちの里の住みうかりしも (拾遺・雑賀・1197・藤原伊尹)
 紀友則身まかりにけるに詠める

明日しらぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ (拾遺・哀傷・1317・紀貫之)
 題しらず

山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき (拾遺・哀傷・1329・よみ人しらず)

後拾遺集

正月子日にあたりて侍りけるに、良暹法師のもとより子日しになん出づる、いざなどいひにお
 こせて侍りけるに、またも音せで、日暮れにければ、よみてつかはしける

けふは君いかなる野辺に子の日して人のまつをば知らぬなるらん (後拾遺・春上・27・賀茂成助)
 ある所の歌合に梅をよめる

梅の花にほふあたりの夕暮はあやなく人にあやまたれつつ (後拾遺・春上・51・大中臣能宣)
 永承六年五月、殿上根合に早苗をよめる

さみだれに日も暮れぬめり道とほみ山田の早苗とりも果てぬに (後拾遺・夏・205・藤原隆資)
 俊綱朝臣のもとにて、晩涼如秋といふをよみ侍ける

夏山の楢の葉そよぐ夕暮はことしも秋の心地こそすれ (後拾遺・夏・231・源頼綱)
 七月七日よめる

織女はあさひく糸の乱れつつとくとやけふの暮を待つらん (後拾遺・秋上・240・小左近)
 山寺に侍りけるに、人々まうで来て、歸りけるによめる

とふ人も暮るれば歸る山里にもろともにすむ秋夜の月 (後拾遺・秋上・259・素意)
 題しらず

いろいろの花のひもとく夕暮に千代松むし声ぞ聞こゆる (後拾遺・秋上・266・清原元輔)

題しらず

浅茅生の秋の夕暮鳴く虫はわがごと下に物や悲しき (後拾遺・秋上・271・平兼盛)

禅林寺に人々まかりて、山家秋晩といふ心をよみ侍りける

暮れゆけば浅茅が原の虫の音も尾上の鹿も声たてつなり (後拾遺・秋上・281・源頼家)

祐子内親王家歌合によみ侍りける

小倉山たちども見えぬ夕霧に妻まどはせる鹿ぞ鳴くなる (後拾遺・秋上・292・江侍従)

題しらず

君なくて荒れたる宿の浅茅生にうづら鳴くなり秋の夕暮 (後拾遺・秋上・302・源時綱)

寛和元年八月七日、内裏歌合によみ侍りける

いかにして玉にもぬかむ夕されば萩の葉分きに結ぶ白露 (後拾遺・秋上・307・橋為義)

天曆御時の御屏風に、小鷹狩する野に、旅人のやどれる所をよめる

秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花こよひばかりの宿も貸さなん (後拾遺・秋上・314・清原元輔)

題しらず

いとどしく慰めがたき夕暮に秋とおぼゆる風ぞ吹くなる (後拾遺・秋上・318・源道濟)

村上御時、八月ばかり、上ひさしくわたらせ給はで、忍びてわたらせ給けるを、知らず顔にて
ことにひき侍ける

さらでだにあやしきほどの夕暮に萩吹く風の音ぞ聞こゆる (後拾遺・秋上・319・徽子女王)

題しらず

さびしさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮 (後拾遺・秋上・333・良暹)

題しらず

夕日さす裾野のすすき片よりに招くや秋を送るなるらん (後拾遺・秋下・371・源頼綱)

九月尽日よみ侍りける

秋はただ今日ばかりぞとながむれば夕暮にさへなりにけるかな (後拾遺・秋下・374・源賢)

九月尽日、伊勢大輔がもとに遣ける

年つもる人こそいとど惜しまるれ今日ばかりなる秋の夕暮 (後拾遺・秋下・375・大貳資通)

津の国へまかりける道にて

蘆の屋の昆陽のわたりには日は暮れぬいづち行くらん駒にまかせて (後拾遺・羈旅・507・能因)

七月ついたちごろに、尾張に下りけるに、夕涼みに関山を越ゆとて、しばし車をとどめて休み
侍りて、よみ侍りける

越えはてば都も遠くなりぬべし関の夕風しばし涼まん (後拾遺・羈旅・511・赤染衛門)

右兵衛督俊実、子におくれて嘆き侍りけるころ、とぶらひにつかはしける

いかばかり寂しかるらんこがらしの吹きにし宿の秋の夕暮 (後拾遺・哀傷・554・源隆俊女)

題しらず

逢ふことを夕暮ごとに出で立てど夢路ならではかひなかりけり (後拾遺・哀傷・601)

或人云、この歌、思ふ女を置きて、みまかりける男の娘の夢に、これ彼の女に取らせよとて
よみ侍ける

平行親朝臣の女のもとにまかりそめてまたの朝によめる

暮るるまの千歳を過ぐすこちして待つはまことに久しかりけり (後拾遺・恋二・667・藤原隆方)

題しらず

けふよりはとく呉竹のふしごとに夜は長かれと思ほゆるかな (後拾遺・恋二・668・源定季)

人のもとに通ふ人に代りてよめる

けふ暮るるほど待つだにも久しきにかで心をかけて過ぎけん (後拾遺・恋二・670・伊勢大輔)

女のもとより雪降り侍ける日帰りてつかはしける

明けぬれば暮るるものとは知りながらなほうらめしき朝ぼらけかな (後拾遺・恋二・672・藤原道信)

時々物言ふ男、暮れゆくばかりなど言ひて侍りければよめる

ながめつつことありがほに暮らしてもかならず夢に見えばこそあらめ (後拾遺・恋二・679・相模)

越前守景理、夕さりに来むといひて音せざりければよめる

夕露は浅茅がうへと見しものを袖におきても明かしつるかな (後拾遺・恋二・682・大輔命婦)

題しらず

淀野へとみまくさ刈りにゆく人も暮にはただに帰るものかは (後拾遺・恋二・685・源重之)

物言ひ侍りける男の、昼などは通ひつつ、夜とまり侍らざりければよめる

わが恋は天の原なる月なれや暮るれば出づるかげをのみ見る (後拾遺・恋二・688・一宮紀伊)

男の、来むと言ひ侍りけるを待ちわづらひて、夕占を問はせけるに、よに来じと告げ侍りければ、心ぼそく思ひてよみ侍りける

来ぬまでも待たましものをなかなかたのむかたなきこの夕占かな (後拾遺・恋二・699・よみ人しらず)

夜ごとに、来むといひて夜がれし侍ける男のもとにつかはしける

こよひさへあらばかくこそ思ほえめけふ暮れぬまのいのちもがな (後拾遺・恋二・711・和泉式部)

題しらず

日にそへてうきことのみもまさるかな暮れてはやがて明けずもあらなん (後拾遺・恋四・806・源高明)

母におくれ侍りて又の年、はてのわざなど過ぎてつれづれに侍りける夕暮に、塵つもりたる琴などおしのごひて、弾くとはなけれど、いまはほどなど過ぎにければ、をりをり鳴らしけるを、をばなりける人の相住みける方より、琴の音聞けばものぞかなしきなど言ひにおこせて侍ける
返り事によめる

なき人はおとづれもせで琴の緒をたちし月日ぞかへりきにける (後拾遺・雑一・894・藤原道綱母)

入道摂政よがれがちになり侍りける頃、暮にはなどいひおこせて侍りければいひつかはしける

柏木のもりのした草くれごとになをたのめとやかるを見る見る (後拾遺・雑二・903・藤原道綱母)

来むといひて来ざりける人の、暮にかならずといひて侍りける返り事に

待つほどのすぎのみゆけば大井川のたのむるくれをいかかとぞ思ふ (後拾遺・雑二・904・馬内侍)

女のもとに、暮にはと、男のいひつかはしたる返り事によみ侍ける

あさき瀬をこすいかだしの綱よわみなほこのくれもあやふかりけり (後拾遺・雑二・905・よみ人しらず)

為家朝臣ものいひける女にかれがれになりてのち、みあれの日暮れにはといひて、葵をおこせ

て侍りければ、娘に代りてよみ侍りける

その色の草とも見えずかれにしをいかこいひてかけふは掛くべき (後拾遺・雑二・908・小馬命婦)

女のもとにてあか月鐘を聞きて

曉の鐘の声こそきこゆなれこれを入相と思はましかば (後拾遺・雑二・918・教明親王)

後朱雀院御時、年ごろ夜居つかまつりけるに、後冷泉院位に即かせたまひて、又夜居にまいり

てのち、上東門院にたてまつり侍ける

雲のうへにひかりかくれし夕べより幾夜といふに月を見るらん (後拾遺・雑三・977・明快)

世の中騒がしく侍りける夕暮に、中納言定頼がもとにつかまはしける

つねよりもはかなきころの夕暮はなくなる人ぞ数へられける (後拾遺・雑三・1010・藤原頼宗)

中関白の忌に法興院に籠りて、あか月がたに千鳥の鳴き侍りければ

明けぬなり賀茂の川瀬に千鳥鳴く今日もはかなく暮れむとすらん (後拾遺・雑三・1014・円昭)

良暹法師のもとに遣しける

思ひやる心さへこそさびしけれ大原山の秋の夕暮 (後拾遺・雑三・1038・藤原国房)

後冷泉院親王の宮と申ける時、上のをのこども一品宮の女房ともろともに桜の花をもてあそび

けるに、故中宮の出羽も侍りと聞きてつかはしける

花ざかり春のみ山のあけぼのに思ひわするな秋の夕暮 (後拾遺・雑五・1102・源為善)

山庄にまかりて日暮れにければ

日も暮れぬ人も帰りぬ山里は峰のあらしの音ばかりして (後拾遺・雑五・1145・源頼実)

伏見といふ所に四条の宮の女房あまた遊びて、日暮れぬさきに帰らむとしければ

みやこ人暮るれば帰るいまよりは伏見の里の名をもたのまじ (後拾遺・雑五・1146・橘俊頼)

月輪観をよめる

月の輪に心をかけし夕べよりよろづのことを夢と見るかな (後拾遺・雑六・1188・覚超)

金葉集

良暹法師しのびて物へまかりけるに、右大弁経頼が家に梅のさかりに咲きたりければ、門にひねもすに立ちくらし、夕方言ひ入れはべりける

梅の花にほふあたりは避きてこそ急ぐ道をばゆくべかりけれ (金葉・春・17・良暹)

呼子鳥をよめる

糸鹿山くる人もなき夕暮にころぼそくも呼子鳥かな (金葉・春・26・前斎院尾張)

堀河院御時、女房達を花山の花見せにつかはしたりけるが帰りまいりて、御前にて歌つかうまつりけるに、女房にかはりてよませ給ける

今日暮れぬ明日もきてみむ桜花ころしてふけ春の山風 (金葉・春・44・源師俊)

晩見躑躅といへることをよめる

入日さす夕くれなるの色はえて山下てらすいはつつじかな (金葉・春・80・摂政家参河)

三月尽寄恋といへることをよめる

春は惜し人は今宵とたのむれば思ひわづらふ今日の暮れかな (金葉・春・91・源有仁)

卯花をよめる

雪としもまがひもはてず卯の花は暮るれば月の影かとも見ゆ (金葉・夏・100・江侍従)

水風晩涼といへることをよめる

風ふけば蓮のうき葉に玉こえてすずしくなりぬ蝸の声 (金葉・夏・145・源俊頼)

二条関白の家にて雨後野草といへる事をよめる

この里も夕立しけり浅茅生に露のすがらぬくさの葉もなし (金葉・夏・150・源俊頼)

百首歌中に、秋立つ心をよめる

とことほに吹く夕暮の風なれど秋立つ日こそ涼しかりけれ (金葉・秋・156・藤原公実)

師賢朝臣の梅津に入々まかりて、田家秋風といへることをよめる

夕されば門田の稲葉おとづれてあしのまる屋に秋風ぞふく (金葉・秋・173・源経信)

三日月の心をよめる

山の端にあかず入りぬる夕月夜いつ有明にならんとすらん (金葉・秋・174・大江公資)

摂政左大臣の家にて、夕月夜の心をよませ待けるによめる

風ふけば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕月夜かな (金葉・秋・175・藤原忠隆)

顕隆卿家歌合に、女郎花をよめる

夕露のたまかづらしてをみなへし野原の風に折れやしぬらん (金葉・秋・231・藤原俊忠)

堀河院御時、御前にて各題を探りて歌つかうまつりけるに、薄をとりてつかまつれる

うづら鳴く真野の入江のはまかぜに尾花なみよる秋の夕暮 (金葉・秋・239・源俊頼)

河霧をよめる

宇治川のかはせも見えぬ夕霧に槇の島人ふねよばふなり (金葉・秋・240・藤原基光)

晩恋といへる心をよめる

逢ふことをこよひと思はば夕月日入る山のはもうれしからまし (金葉・恋下・427・源雅定)

恋の心をよめる

暮るる間もさだめなき世にあふ事をいつとも知らで恋わたるかな (金葉・恋下・431・隆源)

暮にはかならずとたのめたりける人の、二十日の月の出づるまで見えざりければよめる
 契りおきし人もこずゑの木の間にたのめぬ月の影ぞもりくる (金葉・恋下・470・撰政家堀河)
 人の夕方まで来んと申たりければ、よめる
 恨むなよ影見えがたき夕月夜おぼろげならぬ雲まつ身ぞ (金葉・恋下・483・一宮紀伊)
 百首歌中に山家をよめる
 蝸の声ばかりする柴の戸は入日のさすにまかせてぞみる (金葉・雑上・568・藤原顕季)
 兼房朝臣重服になりて籠り居たりけるに、出羽弁がもとより、訪ひたりけるを返しせよ、と申
 しければよめる
 悲しさのその夕暮のままならばありへて人に問はれましやは (金葉・雑下・624・橋元任)
 日の入るを見て
 日の入るは紅にこそにたりけれ 観暹
 茜さすとも思ひけるかな 平為成 (金葉・雑下・652)
 関路千鳥といへる事をよめる
 風はやみとしまが崎を漕ぎ行けば夕浪千鳥立み鳴くなり (金葉・補遺歌・684・源顕仲)

詞花集

神まつりをよめる
 さか木とる夏の山路やとをからむゆふかけてのみまつる神かな (詞花・夏・54・源兼昌)
 題しらず
 川上に夕立すらし水屑せく梁瀬のさ波たちさはぐなり (詞花・夏・78・曾禰好忠)
 閏六月七日よめる
 つねよりも嘆きやすらむたなばたは逢はまし暮をよそにながめて (詞花・夏・79・皇后宮大式)
 承暦二年内裏歌合によめる
 たなばたにこころは貸すと思はねど暮れゆく空はうれしかりけり (詞花・秋・86・藤原顕綱)
 題しらず
 ひとりみてながむるやどの萩の葉に風こそわたれ秋の夕暮 (詞花・秋・107・源道濟)
 霧をよめる
 夕霧にこずゑもみえずはつせ山入相の鐘の音ばかりして (詞花・秋・112・源兼昌)
 賀茂の斎ときこえける時、本院の透垣に朝顔の花の咲き懸りて侍けるをよめる
 神垣にかかるとならば朝顔もゆふかくるまでにほはざらめや (詞花・秋・114・祿子内親王)
 陸奥の国の任果ててのぼり侍けるに、尾張の国の鳴海野に鈴虫の鳴き侍けるをよめる
 ふるさとかはらざりけり鈴虫の鳴海の野への夕暮のこゑ (詞花・秋・121・橋為仲)
 寛治元年太皇太后宮の歌合によめる

夕さればなにかいそがむもみぢ葉のしたてる山は夜もこえなん (詞花・秋・132・大江匡房)

大納言経信大幸師にてくだり侍けるに、俊頼朝臣まかりければ、いひつかはしける
暮れはまづそなたをのみぞながむべき出でむ日ごとに思ひおこせよ (詞花・別・183・太皇太后宮甲斐)

冬のころ、暮れに逢はむといひたる女に、暮らしかねていひつかはしける
ほどもなく暮ると思ひし冬の日のころもとなきをりもありけり (詞花・恋上・231・道命)

左京大夫顕輔が家に歌合し侍けるによめる
ころをば留めてこそは帰りつれあやしや何の暮をまつらん (詞花・恋下・236・藤原顕広)
長月のつごもりの日の朝、初めたる女のもとより帰りて、たちかへりつかはしける
みな人の惜しむ日なれど我はただ遅く暮れゆくなげきをぞする (詞花・恋下・238・よみ人しらず)
題しらず

夕暮にもの思ふことはまさるやと我ならざらむ人にとはばや (詞花・恋下・249・和泉式部)
大江公資に忘られてよめる

夕暮はまたれしものをいまはただ行くらむかたを思ひこそやれ (詞花・恋下・270・相模)
題しらず

夕霧に佐野の舟橋おとすなりたなれの駒のかへりくるかも (詞花・雑上・328・俊雅母)
入相の鐘のこゑを聞きてよめる
夕暮はものぞかなしき鐘の音をあすもきくべき身とし知らねば (詞花・雑下・357・和泉式部)
夏の夜、端に出でて涼み侍けるに、夕闇のいと暗く侍ければよめる
この世だに月まつほどはくるしきにあはれいかなる闇にまどはむ (詞花・雑下・360・顕仲女)
一条摂政みまかりにけるころよめる

夕まぐれ木繁き庭をながめつつ木の葉とともにおつるなみだか (詞花・雑下・396・藤原義孝)

千載集

花を尋ねて日暮れぬといへる心をよめる
暮れはてぬ帰さは送れやまざくらたがためにきてまどふとか知る (千載・春上・61・源俊頼)
弥生のつごもりによみ侍ける
ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮の空 (千載・春下・124・式子内親王)
三月尽の心をよみ侍ける
入り日さす山のはさへぞうらめしき暮れずは春のかへらましやは (千載・春下・126・村上源雅通)
堀河院御時、百首歌たてまつりける時、春の暮をよめる
つねよりもけふの暮るるを惜しむかないまいくたびの春と知らねば (千載・春下・134・大江匡房)
堀河院御時、百首歌たてまつりける時、春の暮をよめる

けふ暮れぬ花のちりしもかくぞありしふたたび春はものを思ふよ (千載・春下・135・前斎宮河内)

暮見卯花といへる心をよみ侍ける

夕月夜ほのめくかげも卯花の咲けるわたりはさやけかりけり (千載・夏・140・藤原実房)

暮天郭公といへる心をよみ侍ける

ほととぎすなほはつ声をしのぶ山夕ある雲のそこになくなり (千載・夏・157・守覚)

時鳥の歌とてよめる

風越を夕こえくればほととぎすふもとの雲のそこになくなり (千載・夏・158・藤原清輔)

郭公の歌とてよみ侍ける

夕月夜いるさの山の木がくれにほのかになのるほととぎすかな (千載・夏・163・藤原宗家)

松下逐涼といへる心をよみ侍ける

常夏の花もわすれてあき風を松のかげにてけふはくれぬる (千載・夏・207・具平親王)

題しらず

夕されば玉みるかすも見えねども関の小川の音ぞすずしき (千載・夏・211・藤原道経)

雨後明月といへる心をよめる

夕立のまだはれやらぬ雲まよりおなじ空とも見えぬ月かな (千載・夏・217・俊恵)

百首歌たてまつりける時、六月祓をよめる

けふくれば麻の立枝に木綿かけて夏みな月のみそぎをぞする (千載・夏・223・藤原季通)

百首歌たてまつりける時、六月祓をよめる

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎにすつる夏の暮れかな (千載・夏・224・藤原俊成)

七夕の心をよめる

七夕の心のうちやいかならむ待ちこしけふの夕暮の空 (千載・秋上・235・藤原兼実)

題しらず

人もがな見せも聞かせも萩の花さく夕かげのひぐらしの声 (千載・秋上・247・和泉式部)

摂政前右大臣家に歌合し侍ける時、野径秋夕といへる心をよめる

夕されば萱がしげみになきかはす虫のねをさへわけつつぞゆく (千載・秋上・255・藤原盛方)

百首歌たてまつりける時、秋歌とてよめる

夕されば野辺の秋風身にしみてうづらなくなり深草のさと (千載・秋上・259・藤原俊成)

題しらず

なにとなく物ぞかなしき菅原や伏見の里の秋の夕暮 (千載・秋上・260・源俊頼)

崇徳院に百首歌たてまつりける時よめる

はかなさを我身のうへによそふればたもとにかかる秋の夕露 (千載・秋上・264・待賢門院堀河)

題しらず

夕まぐれ萩ふく風の音聞けばたもとよりこそ露はこぼるれ (千載・秋上・266・藤原季経)

秋歌とてよみ侍ける

- 夕されば小野の浅茅生玉ちりて心くだくる風のおとかな (千載・秋上・272・藤原兼実)
月の歌あまたよみ侍ける時よみ侍ける
- 秋の夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな (千載・秋上・274・藤原実家)
月歌三十首よませ侍ける時よみ侍ける
- 秋の月たかねの雲のあなたにて晴れゆく空の暮るるまちけり (千載・秋上・275・藤原忠通)
摂政前右大臣家に百首歌よませ侍ける時、月歌とてよめる
- いでぬより月みよとこそさえにけれ姨捨山の夕暮の空 (千載・秋上・278・藤原隆信)
堀河院御時、百首歌たてまつりける時よめる
- 山里はさびしかりけりこがらしのふく夕暮のひぐらしの声 (千載・秋下・303・藤原仲実)
承暦二年内裏歌合によめる
- 夕暮は小野の萩原ふくかぜにさびしくもあるか鹿のなくなる (千載・秋下・306・藤原正家)
百首歌たてまつりける時よめる
- さらぬだに夕べさびしき山ざとの霧のまがきにを鹿なくなり (千載・秋下・311・待賢門院堀河)
鹿の歌とてよめる
- さを鹿の妻よぶ声もいかなれや夕べはわきてかなしかるらん (千載・秋下・317・藤原脩範)
鹿の歌とてよめる
- よそにだに身にしむ暮れの鹿のねをいかなる妻かつれなかるらん (千載・秋下・320・俊恵)
鹿の歌とてよめる
- 夕まぐれさてもや秋はかなしきと鹿のね聞かぬ人にとはばや (千載・秋下・321・道因)
鹿の歌とてよめる
- つねよりも秋の夕べをあはれとは鹿のねにてや思ひそめけん (千載・秋下・322・賀茂政平)
霧の歌とてよめる
- 夕霧や秋のあはれをこめつらむわけいるそでに露のをきそふ (千載・秋下・343・宗円)
暮尋草花といへる心をよませ給ける
- 秋ふかみたそかれ時のふぢばかまにほふは名のる心ちこそすれ (千載・秋下・344・崇徳院)
百首歌たてまつりける時よめる
- いかにして岩間も見えぬ夕霧に戸無瀬のいかだおちてきつらん (千載・秋下・345・藤原親隆)
秋歌とてよめる
- しぐれゆくよものこずゑの色よりも秋は夕べのかはるなりけり (千載・秋下・355・藤原定家)
山寺秋暮といへる心をよみ侍ける
- さらぬだに心ぼそきを山里の鐘さへ秋の暮れをつぐなる (千載・秋下・382・覚忠)
堀河院御時、百首歌たてまつりける時、鷹狩の心をよめる
- 夕まぐれ山かたつきてたつ鳥の羽をとに鷹をあはせつるかな (千載・冬・423・源俊頼)
歳暮述懐といへる心をよめる

かずならぬ身にはつもらぬ年ならばけふの暮れをもなげかざらまし (千載・冬・472・惟宗広言)

歳暮心をよみ侍ける

ひととせははかなきゆめの心ちして暮れぬるけふぞおどろかれける (千載・冬・474・俊宗)

かしらおろして後、大原にこもりゐて侍ける時に、閑中歳暮といへる心を上人どもよみ侍ける
時よめる

みやこにておくりむかふといそぎしを知らでや年のけふは暮れなむ (千載・冬・475・桓武平親範)

百首歌めしける時、旅の歌とてよませたまうける

笹の葉を夕露ながら折りしけば玉散る旅の草まくらかな (千載・羈旅・514・待賢門院安芸)

円位法師がよませ侍ける百首歌中に、旅の歌とてよめる

岩根ふみ峰の椎柴折りしきて雲に宿かる夕暮の空 (千載・羈旅・544・寂蓮)

題しらず

うたた寝の夢に逢ひ見てのちよりは人も頼めぬ暮れぞ待たる (千載・恋二・738・源慶)

忍びて暮にまうのぼるべきよし侍ける人に、つかはしける

などやかくさも暮れ難き大空ぞ我がまつことはありと知らずや (千載・恋二・744・二条院)

契暮秋恋といへる心をよみ侍ける

秋は惜し契りは待たるとにかくに心にかかる暮れの空かな (千載・恋二・746・藤原良経)

題しらず

暮れにとも契りてたれか帰らん思ひ絶えたるあけぼのの空 (千載・恋二・749・藤原家隆)

晩風催恋といへる心をよめる

よとともにつれなき人を恋草の露こぼれます秋の夕風 (千載・恋二・772・藤原頭家)

法住寺殿の殿上の歌合に、臨期違約恋といへる心をよめる

そま川の浅からずこそ契りしかなどこの暮れを引きたがふらん (千載・恋二・778・藤原盛方)

位の御時、皇太后宮初めてまゐり給へりける後朝につかはしける

万世を契りそめつるしにはかつかがつけふの暮れぞ久しき (千載・恋三・797・後白河院)

夢中契恋といへる心をよめる

見し夢の覚めぬやがてのうつつにてけふと頼めし暮れを待たばや (千載・恋三・835・小侍従)

大宰師敦道の御子中絶え侍けるころ、秋つかた思ひ出でてものして侍りけるに、よみ侍ける

待つとてもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ秋の夕暮 (千載・恋四・844・和泉式部)

二条院御時うえのをの子ども百首歌たてまつりける時、忍恋の心をよめる

月待つと人にはいひてながむればなぐさめ難き夕暮の空 (千載・恋四・873・藤原範兼)

摂政右大臣時、家歌合に、恋の心をよめる

思ひ寝の夢になぐさむ恋なれば逢はねど暮れの空ぞ待たる (千載・恋四・898・丹後)

題しらず

思ひ出でよ夕べの雲もたなびかばこれや嘆きに絶えぬけぶりと (千載・恋五・922・藤原忠良)

百首歌めしける時、恋歌とてよませたまうける
 何せむに空頼めとて恨みけん思ひ絶えたる暮れもありけり (千載・恋五・944・上西門院兵衛)
 暮恋故人といへる心を
 なき人を思ひ出でたる夕暮は恨みしことぞくやしかりける (千載・恋五・954・覺性)
 わづらふ事ありて雲林院なる所へまかれりけるに、人のとぶらへりければつかは
 しける
 この世をば雲の林に門出して煙とならむ夕べをぞ待つ (千載・雑中・1124・良暹)
 様変へむと思ひ立つ人、物あはれなる夕暮に箏弾くを聞きてよめる
 今はとてかきなすことのはての緒に心細くもなりまさるかな (千載・雑中・1142・二条太皇太后宮
 式部)
 大幸大式重家入道みまかりて後、山寺懐旧といへる心をよめる
 初瀬山入相の鐘を聞くたびにむかしの遠くなるぞかなしき (千載・雑中・1154・藤原有家)
 堀河院の御時百首たてまつりける時、述懐の歌よみてたてまつり侍ける
 ……さらにもいはじ 冬枯れの 尾花がすえの 露なれば あらしをだにも 待たずして 本の零
 と なりはてむ ほどをばいつと 知りてかは 暮にとだにも 沈むべき…… (千載・雑下・1160・
 源俊頼)
 旅の恋
 したひ来る恋の奴の旅にても身のくせなれや夕とどろきは (千載・雑下・1192・源俊頼)
 百首歌の中に、法文の歌に、普賢の願の唯此願王不相捨離といへる心を
 ふるさとをひとり別るる夕べにもおくるは月のかげとこそ聞け (千載・釈教・1222・式子内親王)
 勸発品の心をよみ侍ける
 さらにまた花ぞ降りしく驚の山法のむしろの暮れ方の空 (千載・釈教・1246・藤原俊成)
 山階寺の涅槃会の暮れ方に、遮羅入滅の昔を思ひてよみ侍りける
 望月の雲かくれけむいにしへのあはれを今日の空にしるかな (千載・釈教・1249・恵章)

新古今集

詩を作らせて歌にあはせ侍しに、水郷春望といふことを
 夕月夜しほみちくらし難波江の蘆の若葉にこゆる白波 (新古今・春上・26・藤原秀能)
 晚霞といふことをよめる
 なごの海の霞のまよりながむれば入る日をあらふ沖つ白浪 (新古今・春上・35・藤原実定)
 をのこども詩を作りて歌にあはせ侍しに、水郷春望といふことを
 見わたせば山もとかすむ水無瀬河夕べは秋となに思ひけん (新古今・春上・36・後鳥羽院)
 帰雁を

わするなよたのむの沢をたつ雁も稲葉の風の秋の夕暮 (新古今・春上・61・藤原良経)
 摂政太政大臣家百首歌合に、野遊の心を
 思ふどちそことも知らず行き暮れぬ花の宿かせ野への鶯 (新古今・春上・82・藤原家隆)
 山里にまかりてよみ侍ける
 山里の春の夕暮きてみればいりあひの鐘に花ぞちりける (新古今・春下・116・能因)
 太神宮に百首歌たてまつり侍し中に
 いかにせん世にふるながめ柴の戸にうつろふ花の春の暮れ方 (新古今・春下・[1980]・後鳥羽院)
 千五百番歌合に
 おもひたつ鳥は古巢もたのむらんなれぬる花のあとの夕暮 (新古今・春下・154・寂蓮)
 山家暮春といへる心を
 柴の戸をさすや日かげのなごりなく春暮れかかる山のはの雲 (新古今・春下・173・宮内卿)
 時鳥をよめる
 一声はおもひぞあへぬ郭公たそかれ時の雲のまよひに (新古今・夏・208・高倉)
 千五百番歌合に
 郭公なほうとまれぬ心かなながなく里のよその夕暮 (新古今・夏・216・藤原公経)
 五首歌人々によませ侍ける時、夏歌とてよみ侍ける
 うちしめりあやめぞかをる郭公なくや五月の雨の夕暮 (新古今・夏・220・藤原良経)
 題しらず
 行く末をたれしのべとて夕風にちぎりかおかん宿のたち花 (新古今・夏・239・源通具)
 守覚法親王、五十首歌よませ侍ける時
 夕暮はいづれの雲のなごりとはなたち花に風のふくらん (新古今・夏・247・藤原定家)
 摂政太政大臣家百首歌合に、鶺鴒をよみ侍ける
 鶺鴒舟あはれとぞ思ふもののふの八十字治河の夕闇の空 (新古今・夏・251・慈円)
 題しらず
 よられつる野もせの草のかげろひてすずしくもる夕立の空 (新古今・夏・263・西行)
 崇徳院に百首歌たてまつりける時
 おのづからすずしくもあるか夏衣日も夕暮の雨のなごりに (新古今・夏・264・藤原清輔)
 千五百番歌合に
 露すがる庭の玉笹うちなびきひとむらすぎぬ夕立の雲 (新古今・夏・265・藤原公経)
 雲隔遠望といへる心をよみ侍ける
 とをちには夕立すらしひさかたの天の香具山くもがくれゆく (新古今・夏・266・源俊頼)
 夏月をよめる
 庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな (新古今・夏・267・源頼政)
 百首歌の中に

- 夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの声 (新古今・夏・268・式子内親王)
千五百番歌合に
- 夕づく日さすやいほりの柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの声 (新古今・夏・269・藤原忠良)
百首歌たてまつりし時
- なく蝉の声もすずしき夕暮に秋をかけたるもりの下露 (新古今・夏・271・讃岐)
刑部卿頼輔歌合し侍けるに、納涼をよめる
- ひさぎ生ふるかた山かげにしひつゝふきけるものを秋の夕風 (新古今・夏・274・俊恵)
夕顔をよめる
- 白露のなさをきけることの葉やほのぼの見えし夕顔の花 (新古今・夏・276・藤原頼実)
百首歌よみ侍ける中に
- たそかれの軒端のおぎにともすればほに出でぬ秋ぞ下にこととふ (新古今・夏・277・式子内親王)
夏の歌とてよみ侍ける
- 雲まよふ夕べに秋をこめながら風もほに出でぬおぎの上かな (新古今・夏・278・慈円)
太神宮にたてまつりし夏歌中に
- 山里の峰のあま雲とだえして夕べすずしまきの下露 (新古今・夏・279・後鳥羽院)
文治六年女御入内屏風に
- 岩井くむあたりのを雀たまこえてかつがつむすぶ秋の夕露 (新古今・夏・280・藤原兼実)
延喜御時、月次屏風に
- みそぎする河の瀬みればからころも日も夕暮に浪ぞたちける (新古今・夏・284・紀貫之)
千五百番歌合に
- 秋はただ心よりおく夕露を袖のほかとも思ひけるかな (新古今・秋上・297・越前)
題しらず
- 夕暮は荻ふく風の音まさるいまはたいかに寝覚めせられん (新古今・秋上・303・具平親王)
題しらず
- 夕されば荻の葉むけをふく風のことぞともなく涙おちけり (新古今・秋上・304・藤原実定)
題しらず
- この夕べふりつる雨は彦星のとわたる舟の櫂のしづくか (新古今・秋上・314・山部赤人)
百首歌のなかに
- ながむれば衣手すずしひさかたのあまの河原の秋の夕暮 (新古今・秋上・321・式子内親王)
七夕の心を
- 星あひの夕べすずしきあまの河もみちの橋をわたる秋風 (新古今・秋上・323・藤原公経)
題しらず
- 秋萩のさきちる野辺の夕露にぬれつつきませ夜はふけぬとも (新古今・秋上・333・柿本人麻呂)
千五百番歌合に

- 夕されば玉ちる野辺のをみなへし枕さだめぬ秋風ぞふく (新古今・秋上・338・藤原良平)
 崇徳院に百首歌たてまつりける時
- うす霧のまがきの花の朝じめり秋は夕べとたれかいひけん (新古今・秋上・340・藤原清輔)
 題しらず
- 小倉山ふもとの野辺の花すすきほのかに見ゆる秋の夕暮 (新古今・秋上・347・よみ人しらず)
 題しらず
- 身にとまる思ひを萩の上葉にてこのごろかなし夕暮の空 (新古今・秋上・352・慈円)
 崇徳院御時、百首歌めしけるに、萩を
- 身のほどを思ひつづくる夕暮の萩の上葉に風わたるなり (新古今・秋上・353・源行宗)
 百首歌たてまつりし時
- おしなべて思ひしことのかずかずになほ色まさる秋の夕暮 (新古今・秋上・357・藤原良経)
 題しらず
- 暮れかかるむなしき空の秋をみておぼえずたまる袖の露かな (新古今・秋上・358・藤原良経)
 家に百首歌合し侍けるに
- ものおもはでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮 (新古今・秋上・359・藤原良経)
 をのこども詩を作りて歌にあはせ侍しに、山路秋行といふことを
- み山路やいつより秋の色ならん見ざりし雲の夕暮のそら (新古今・秋上・360・慈円)
 題しらず
- さびしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮 (新古今・秋上・361・寂蓮)
 題しらず
- こころなき身にも哀はしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮 (新古今・秋上・362・西行)
 西行法師すすめて百首歌よませ侍りけるに
- 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮 (新古今・秋上・363・藤原定家)
 五十首歌たてまつりし時
- たへてやは思ひありともいかがせんむぐらの宿の秋の夕暮 (新古今・秋上・364・藤原雅経)
 秋の歌とてよみ侍ける
- 思ふことさしてそれとはなきものを秋の夕べを心にぞとふ (新古今・秋上・365・宮内卿)
 秋の歌とてよみ侍ける
- 秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただわれからの露の夕暮 (新古今・秋上・366・鴨長明)
 題しらず
- ひぐらしのなく夕暮ぞうかりけるいつもつきせぬ思ひなれども (新古今・秋上・369・藤原長能)
 千五百番歌合に
- さらにまた暮れをたのめとあけにけり月はつれなき秋の夜の空 (新古今・秋上・434・源通光)
 和歌所にて、をのこども歌よみ侍りしに、夕べの鹿といふことを

- 下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん (新古今・秋下・437・藤原家隆)
 晩聞鹿といふことをよみ侍し
- われならぬ人もあはれやまさるらん鹿なく山の秋の夕暮 (新古今・秋下・443・源通親)
 五十首歌たてまつりし時
- むらさめの露もまだひぬ真木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮 (新古今・秋下・491・寂蓮)
 千五百番歌合に
- 入日さす麓のおばなうちなびきたが秋風にうづら鳴くらん (新古今・秋下・513・源通光)
 題しらず
- 入日さす佐保の山べのははそ原くもらぬ雨と木の葉ふりつつ (新古今・秋下・529・曾禰好忠)
 深山落葉といへる心を
- 日暮るればあふ人もなしまさき散る峰の嵐のおとばかりして (新古今・冬・557・源俊頼)
 題しらず
- おのづからおとする物は庭のおもに木の葉ふきまく谷の夕風 (新古今・冬・558・藤原清輔)
 春日社歌合に、落葉といふ事をよみてたてまつりし
- 山里の風すさまじき夕暮に木の葉みだれて物ぞかなしき (新古今・冬・564・藤原秀能)
 題しらず
- 柴の戸に入日のかげはさしながらいかにしぐるる山辺なるらん (新古今・冬・572・藤原清輔)
 みちのくににまかりける時、よみ侍ける
- 夕されば潮風越してみちのくの野田の玉河ちどりなくなり (新古今・冬・643・能因)
 題しらず
- 夕風に門わたる千鳥なみまより見ゆる小島の雲にきえぬる (新古今・冬・645・藤原実定)
 最勝四天王院の障子に、鳴海の浦かきたる所
- 浦人の日も夕暮になるみ瀉かへる袖より千鳥なくなり (新古今・冬・650・源通光)
 入道前関白、右大臣に侍ける時、家歌合に、雪をよめる
- ふりそむるけさだに人のまたれつるみ山の里の雪の夕暮 (新古今・冬・663・寂蓮)
 百首歌たてまつりし時
- 駒とめて袖うちはらふかげもなしさののわたりの雪の夕暮 (新古今・冬・671・藤原定家)
 題しらず
- 年のあけてうき世の夢のさむべくは暮るともけふは厭はざらまし (新古今・冬・699・慈円)
 建久九年大嘗会悠紀歌、青羽山
- たちよればすずしかりけり水鳥の青羽の山の松の夕風 (新古今・賀・755・藤原光範)
 一品資子内親王にあひて、昔のことども申し出だしてよみ侍ける
- 袖にさへ秋の夕べはしられけりきえし浅茅が露をかけつつ (新古今・哀傷・778・徽子女王)
 秋のころ、をさなき子におくれたる人に

別れけんなごりの袖もかわかぬにおきやそふらん秋の夕露 (新古今・哀傷・780・大式三位)
 十月許、水無瀬に侍しころ、前大僧正慈円のもとへ、ぬれて時雨のなど申つかはして、次の年の神無月に、無常の歌あまた詠みてつかはし侍し中に

思ひいづるおりたく柴の夕煙むせぶもうれし忘がたみに (新古今・哀傷・801・後鳥羽院)
 返し

思ひいづるおりたく柴ときくからにたぐひしらぬ夕煙かな (新古今・哀傷・802・慈円)
 雨中無常といふことを

なき人のかたみの雲やしほらん夕べの雨に色はみえねど (新古今・哀傷・803・後鳥羽院)
 世のはかなきことを歎くころ、奥陸国に名あるところどころ書きたる絵を見侍りて
 見し人の煙になりし夕べより名ぞむつまじき塩釜の浦 (新古今・哀傷・820・紫式部)
 無常の心を

よもぎふにいつかおくべき露の身はけふの夕暮あすのあけぼの (新古今・哀傷・834・慈円)
 うせにける人の文の、ものの中なるを見出でて、そのゆかりなる人のもとにつかはしける
 暮れぬまの身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつははかなき (新古今・哀傷・856・紫式部)
 実方朝臣奥陸国へ下り侍けるに、餞すとてよみ侍ける

別れ路はいつも歎きの絶えせぬにいとどかなしき秋の夕暮 (新古今・離別・874・藤原隆家)
 奥陸国へまかりける人、餞し侍けるに

君いなば月まつとてもながめやらんあづまのかたの夕暮の空 (新古今・離別・885・西行)
 延喜御時、屏風歌

草まくら夕風さむくなりにはけり衣うつなる宿やからまし (新古今・羈旅・905・紀貫之)
 題しらず

しながどり猪名野をゆけば有馬山夕霧たちぬ宿はなくして (新古今・羈旅・910・よみ人しらず)
 湖の舟にて、夕立のしぬべきよしを申けるを聞きて、よみ侍りける

かきくもり夕だつ浪のあらければうきたる舟ぞしづ心なき (新古今・羈旅・918・紫式部)
 旅にてよみ侍ける

白雲のかかる旅寝もならはぬにふかき山路に日はくれにけり (新古今・羈旅・950・永縁)
 暮望行客といへる心を

夕日さす浅茅が原の旅人はあはれいづくに宿をとるらん (新古今・羈旅・951・源経信)
 摂政太政大臣家歌合に、羈中晚嵐といふことをよめる

いづくにかこよひは宿をかり衣ひも夕暮の峰のあらしに (新古今・羈旅・952・藤原定家)
 旅の歌とてよめる

旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし (新古今・羈旅・953・藤原定家)
 旅の歌とてよめる

けふはまたしらぬ野原に行き暮れぬいづれの山か月はいづらむ (新古今・羈旅・956・源家長)

和歌所の歌合に、羈中暮といふことを
ふるさとも秋は夕べをかたみにて風のみおくる小野の篠原 (新古今・羈旅・957・俊成女)

和歌所の歌合に、羈中暮といふことを
いたづらにたつや浅間の夕煙里とひかぬるをちこちの山 (新古今・羈旅・958・藤原雅経)

和歌所の歌合に、羈中暮といふことを
都をば天つ空とも聞かざりきなに眺むらん雲のはたてを (新古今・羈旅・959・丹後)

和歌所の歌合に、羈中暮といふことを
草まくら夕べの空を人とはばなきてもつげよ初雁のこゑ (新古今・羈旅・960・藤原秀能)

旅歌とて
たれとなき宿の夕べを契りにてかはるあるじをいく夜とふらむ (新古今・羈旅・963・藤原業清)

羈中夕といふ心を
まくらとていづれの草に契るらんゆくをかぎりの野辺の夕暮 (新古今・羈旅・964・鴨長明)

長月のころ、初瀬に詣でける道にてよみ侍ける
初瀬山夕越え暮れて宿とへば三輪の檜原に秋かぜぞ吹く (新古今・羈旅・966・禅性)

詩を歌に合はせ侍しに、山路秋行といへることを
都にもいまや衣をうつつ山夕霜はらふつたのした道 (新古今・羈旅・982・藤原定家)

女につかはしける
風ふけば室の八島の夕煙心のそらにたちけるかな (新古今・恋一・1010・藤原惟成)

水無瀬にてをのこども、久恋といふことをよみ侍しに
思つつ経にける年のかひやなきただあらましの夕暮の空 (新古今・恋一・1033・後鳥羽院)

百首歌の中に忍恋を
忘れてはうち歎かるる夕べかなわれのみ知りてすぐる月日を (新古今・恋一・1035・式子内親王)

千五百番歌合に
ながめわびそれとはなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空 (新古今・恋二・1106・源通光)

夕恋といふ事をよみ侍ける
藻塩やく海人の磯屋の夕煙たつ名もくるし思ひたえなで (新古今・恋二・1116・藤原秀能)

家に百首歌合し侍けるに、祈恋といへる心を
年もへぬいの契りははつせ山をのへの鐘のよその夕暮 (新古今・恋二・1142・藤原定家)

三条関白女御、入内の朝につかはしける
あさばらけおきつる霜の消えかへり暮れ待つほどの袖を見せばや (新古今・恋三・1189・華山院)

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に
庭におふる夕陰草のした露や暮れを待つまの涙なるらん (新古今・恋三・1190・藤原道経)

題しらず
これも又ながき別れになりやせん暮れを待つべき命ならね (新古今・恋三・1192・藤原知家)

題しらず

大井河井堰の水のわくらばにけふはたのめし暮れにやはあらぬ (新古今・恋三・1194・清原元輔)

けふと契りける人の、あるかと問ひて侍ければ

夕暮に命かけたるかぜろふのありやあらずや問ふもはかなし (新古今・恋三・1195・よみ人しらず)

西行法師人々に百首歌よませ侍けるに

あぢきなくつらきあらしの声もうしなど夕暮に待ちならひけん (新古今・恋三・1196・藤原定家)

水無瀬にて恋十五首歌合に、夕恋といへる心を

なにゆゑと思ひもいれぬ夕べだに待ち出でし物を山のはの月 (新古今・恋三・1198・藤原良経)

題しらず

いかがふく身にしむ色のかはるかなたのむる暮れの松風の声 (新古今・恋三・1201・高倉)

題しらず

いま来んとたのめしことを忘れずはこの夕暮の月や待つらん (新古今・恋三・1203・藤原秀能)

題しらず

かけて思ふ人もなければ夕されば面影たえぬ玉かづらかな (新古今・恋三・1219・紀貫之)

建仁元年三月歌合に、遇不遇恋の心を

恨みわび待たじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空 (新古今・恋四・1302・寂蓮)

建仁元年三月歌合に、遇不遇恋の心を

忘れじのことの葉いかになりにけんたのめし暮れは秋風ぞ吹く (新古今・恋四・1303・丹後)

入道前関白太政大臣家の歌合に

わが恋は今をかぎりとはまぐれおぎ吹く風のおとづれてゆく (新古今・恋四・1308・俊恵)

家歌合に

いつも聞く物とや人の思ふらんこぬ夕暮の秋風のこゑ (新古今・恋四・1310・藤原良経)

和歌所の歌合に、深山恋といふことを

さてもなほ問はれぬ秋のゆふは山雲ふく風も峰に見ゆらん (新古今・恋四・1316・藤原家隆)

題しらず

ながめても哀れと思へおほかたの空だにかなし秋の夕暮 (新古今・恋四・1318・鴨長明)

恋歌とてよみ侍りける

わがこひは庭のむら萩うらがれて人をも身をも秋の夕暮 (新古今・恋四・1322・慈円)

被忘恋の心を

知られじなおなじ袖にはかよふともたが夕暮とたのむ秋風 (新古今・恋四・1325・藤原家隆)

摂政太政大臣家百首歌合に、尋恋

心こそゆくへも知らねみわの山すぎの木ずゑの夕暮の空 (新古今・恋四・1327・慈円)

百首歌中に

生きてよもあすまで人もつらからじこの夕暮をとばは問へかし (新古今・恋四・1329・式子内親王)

- 思ふこと侍ける秋の夕暮、独りながめてよみ侍ける
 身にちかくきにけるものを色かはる秋をばよそに思ひしかども (新古今・恋五・1352・源頭房室隆子)
- 年ごろ絶え侍にける女の、くれといふ物尋ねたりける、つかはすとて
 花さかぬ朽ち木のそまの柚人のいかなるくれに思ひ出づらん (新古今・恋五・1398・藤原仲文)
- 百首歌たてまつりし時
 おりにあへばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕暮の声 (新古今・雑上・1477・藤原忠良)
- 千五百番歌合に
 あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなん露の夕暮 (新古今・雑上・1561・藤原俊成)
- 秋の暮に、身の老いぬることを歎きてよみ侍ける
 百年の秋の嵐は過ぐしきぬいづれの暮れの露と消えなん (新古今・雑上・1570・安法)
- 海辺の心を
 いまさらに住みうしとてもいかがせん灘の塩屋の夕暮の空 (新古今・雑中・1605・藤原秀能)
- 題しらず
 厭ひてもなほいとほしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮 (新古今・雑中・1620・藤原家衡)
- 題しらず
 たれ住みて哀知るらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空 (新古今・雑中・1642・西行)
- 法輪寺に住み侍けるに、人の詣で来て、暮れぬとて急ぎ侍ければ
 いつとなき小倉の山のかげを見て暮れぬと人のいそくなるかな (新古今・雑中・1645・道命)
- 題しらず
 古畑のそはのたつ木にある鳩のともよぶ声のすごき夕暮 (新古今・雑中・1676・西行)
- 秋ごろわづらひける、おこたりて、たびたびとぶらひにける人につかはしける
 うれしきは忘れやはするしのぶ草しのぶる物を秋の夕暮 (新古今・雑下・1732・伊勢大輔)
- 例ならで太秦に籠りて侍けるに、心細くおぼえければ
 かくしつ々たべの雲となりもせば哀れかけてもたれかしのぼん (新古今・雑下・1746・周防内侍)
- 述懐の心をよめる
 いたづらに過ぎにしことや歎かれん受けがたき身の夕暮の空 (新古今・雑下・1755・慈円)
- 世中の常なきころ
 けふまでは人を歎きて暮れにけりいつ身の上にならんとすらん (新古今・雑下・1787・大江嘉言)
- 題しらず
 竹の葉に風ふきよわる夕暮のものの哀れは秋としもなし (新古今・雑下・1805・宮内卿)
- 題しらず
 夕暮は雲のけしきを見るからにながめじと思ふ心こそつけ (新古今・雑下・1806・和泉式部)
- 題しらず

暮れぬめりいくかをかくて過ぎぬらん入相の鐘のつくづくとして (新古今・雑下・1807・和泉式部)

題しらず

待たれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらば聞かんとすらん (新古今・雑下・1808・西行)

夕暮に蜘蛛のいとはかなげに巣かくを、常よりもあはれと見て

ささがにの空にすかくもおなじことまたき宿にもいく代かは経ん (新古今・雑下・1817・遍昭)

百首歌に

暮るるまも待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつ也 (新古今・雑下・1847・式子内親王)

太神宮の歌のなかに

ながめばや神路の山に雲きえて夕べの空をいでん月かげ (新古今・神祇・1875・後鳥羽院)

社頭納涼といふことを

五十鈴河そらやまだきに秋の声したつ岩根の松の夕風 (新古今・神祇・1885・大中臣明親)

人々勤めて法文百首歌よみ侍けるに、二乗但空 智如螢火

みちのべの蛍ばかりをしるべにてひとりぞいづる夕闇の空 (新古今・釈教・1951・寂然)

此時已過 命即衰滅

けふ過ぎぬいのちもしかとおどろかす入相の鐘の声ぞかなしき (新古今・釈教・1955・寂然)

美福門院に、極楽六時讃の絵に書かるべき歌たてまつるべきよし侍けるに、よみ侍ける、時に

大衆法を聞て、弥歎喜瞻仰せん

いまぞこれ入日を見てもおもひこし弥陀のみ国の夕暮の空 (新古今・釈教・1967・藤原俊成)

二月十五日の暮れ方に、伊勢大輔がもとにつかはしける

つねよりもけふの煙のたよりにや西をはるかにおもひやるらん (新古今・釈教・1973・相模)

返し

けふはいとど涙にくれぬ西の山おもひ入日のかげをながめて (新古今・釈教・1974・伊勢大輔)